

02

インターナショナル スクールという選択

グローバル化が進む中、インターナショナルスクールも子どもたちの未来を見据えた選択肢の一つ。教育の現場とその先に開ける道を探ります。

さまざまなバックグラウンドを持つ子どもたちとともに学ぶことで、グローバル感覚が自ずと育まれていくインターナショナルスクール（写真はアオバジャパン・インターナショナルスクール）。その教育環境は日本の学校とは大きく異なる。一口に「インター」と言っても、各学校で独自のカリキュラムを採用しており、教育方針や授業方法もそれぞれだ。



REPORTAGE

インターナショナルスクールという選択

インターナショナルスクールで 得られる学びの質とは

インターナショナルスクールとは、どんな学びの場なのでしょうか。東京都練馬区のアオバジャパン・インターナショナルスクールを訪ねました。

文：水本恵美 Wamondo Emi 写真：張滢文 Zhang Yiwang（写真部）、アオバジャパン・インターナショナルスクール提供

教 室横の廊下の壁には生徒たちが授業の一環で制作した掲示物がずらりと並ぶ。国際バカロレア（IB）認定校のアオバジャパン・インターナショナルスクール（以下アオバ）では、IBのカリキュラムの中でも「探究」にフォーカスした授業に力を入れており、これらはその学びの成果物。一方で、同じく英語で教育をするインターナショナルスクールの中には、

IBではなく英米など各国の教育カリキュラムに沿って教える学校もある。

「カリキュラムによって教える方は変わってきますが、多くのインターに通って言えるのは、『国際人』になれる環境であるということ。小さなこ

ろから構えることなく、文化言語、人種などのさまざまな違いも共通点も受け入れたり、

尊重したりすることができ、そういった人としての本質的

な部分を養うことができます」

そう語るのは、アオバのアドミッション・マーケティング&コミュニケーションディレクターを務める木村愛さん。自身もインターナショナルスクールに通った経験を持つ。

**英語は国際人のための
学びのツール**

「国際人」をめざすうえで、気になるのは英語力だ。インタ

ーナショナルスクールに入るためにはどのくらいの英語力が必要とされるのだろうか。

「英検やTOEFLの点数など明確な指標を示すのは難しいですね。インターは『英語を』学ぶ学校ではなく、国際人として活躍するために必要

な知識やスキルを『英語で』学ぶ学校。英語は学ぶためのツールであり、必要とされて

いるのは Communication English ではなく Academic



木村 愛さん

Kimura Ai

アオバジャパン・インターナショナルスクール
アドミッション・マーケティング
& コミュニケーションディレクター

国内のインターナショナルスクールで学び、国際バカロレアのディプロマ資格を取得。海外の大学を卒業後、外資系金融機関などを経て、2012年から現職。

教育環境を考える

国際バカロレアのカリキュラムを採用しているアオバでは、その中でも探究型の学びに力を入れており、グループワークやプレゼンテーションの場が豊富に用意されている。



Q&A

Q インターは義務教育を受けたことにならない?

学校教育法第一条に定められた学校（一条校）を除き、多くのインターは卒業しても義務教育を修了したとは認められない。ただし自治体によっては対応が異なることも。「インターに通いつつも、居住地区の公立学校に籍だけを置くことを認める自治体もあるそうです」（木村さん）。また、CISやWASCなどの国際的な評価団体の認定校であれば、高等学校卒業程度認定試験（旧大検）を受けずに、日本の大学を受験することができる。

Q 学費はどれくらいかかる?

「だいたい年間200万～250万円ほどです。学校によっては、制服や給食、スクールバス、タブレット端末やPCといったデバイスなどの費用がさらに必要となる場合もあります」（木村さん）。一条校以外は国が定める義務教育の対象外となり、助成金などが少ないため、学費は日本の公立や私立の学校に比べてどうしても高額になる。保護者としては、子どもが卒業するまでの学費を支払えるか、入学前にしっかりと検討すべきだ。

Q ICT教育は進んでいるの?

早くからICT（情報通信技術）を学びに導入し、コロナ禍でもスムーズにリモート学習へと切り替えられたインターが多い。「当校の場合、1～3年生にはiPadを、4～12年生にはMacBookを各自で用意してもらっています。台風や大雪などの荒天時にはオンライン授業に切り替えて休校にはありません。デバイスを自己管理する力やネット上の情報に対する判断力など、デジタルリテラシーを育むことも含めて取り組んでいます」（木村さん）

Q 日本語の授業はあるの?

「あります。ただし、インターでは日本語を学ぶ時間は限られてきます。日本語は文化や歴史、季節感などたくさんの要素からなる複雑な言語。だからこそ、ご家庭では日本のことをたくさん教えてほしいですね。日本人であれば、日本のことを知らないという真の国際人にはなれないと思います」（木村さん）。日本語学習の鍵を握るのは保護者。国内旅行や日本語の本・映画などを通して日本の文化や歴史に触れる時間を積極的に設けたいところだ。

English。当校では小学1年生までであれば英語力ゼロでも入学できますが、途中編入の場合は日本語と同程度の英語力が必要です。もしこれから英語を身につけるといふことであれば、保護者も一緒に学んでいく姿勢を子どもに見せることが一番大切です」

ただし、英語力がインターナショナルスクール入学への第一条件ということではない。家庭の教育理念や子どもがこれまで親しんできた学習方法などが各学校の理念や教育の内容と合わなければ、ネイティブ並みの英語力があつたとしてもミスマッチとなる。

「子どもがどんな環境であれ、一番輝けるのか、自信に満ちあふれた学校生活が過ごせるのかを第一に考えてほしいです。学校と一緒に子育てをしていくことが大事なので、ミッシヨンステートメントやバリューに共感できるか。学校側も英語力だけでなく、そういうところも見えています」

やりたいことを徹底的に追究できる

卒業後は多くのインター生が大学へと進学する。インターナショナルスクールや海外の学校からの受験者も受け入れられるべく、日本の大学も総合型選抜（旧AO入試）やIBを活用した入試など、従来とは異なる試験方法を設け、問

口を広げている。そんな傾向もあってか、アオバでは日本と海外の大学へ進学する卒業生の数は半々くらいだという。「とはいえ、卒業後の選択肢は大学だけに限りません。音楽を学びたい子や在学中からモデル活動をしていた子は美術系の専門学校に行ったり、シェフになりたい子は料理の専門学校に進学したり。インターの場合、勉強と同じくらい、アートやスポーツも大事にしている学校が多いので、自己表現の仕方がたくさんあることを知っているんだと思います。そういう意味では、インターは子どもたちがやりたいことを、とことんやらせてもらえる環境です」